

Wine Speak

ワインと建築

このコラムは、ライフワークや趣味の話など、「ワンテーマ」を深く、じっくり語るページです。



阿部容子

私の好きなもの「建築」と「ワイン」である。建築とワインは意外と似ている。

まずは「人がつくりしもの」である。人のアイディアと努力が詰まったものであるのはうまでもないが、両者に共通しているのは、そこに「制約」があることである。

建築は施主の意見や土地の形などの制約がある。ワインにも土地の特徴や気候、さらに消費者に飲まれなければ意味がない。どちらも作り手の個性や理念だけでつくられる芸術とは一線を画すものだと感じる。

それでも、中には歴史に残る建築や、破格のワインとなり、芸術の域に達するものもある。その反対に、私たちが日々住む住宅も建築であり、日々消費される「デイリーワイン」もまたワインなのである。日々付き合うという意味でもこの両者は似ているのである。

どんな有名な建築家が建てた建物でも、使われないと「生きて」いない。そんな建築物を見た時もあった。作品としては素晴らしいのだが、人に使われていない、愛されていないと建築は「生きて」いない。ワインもまた、どんなに有名でも、高くても、人に愛されなければ忘れられていく。だから醸造家からよく聞く話は「年月を経てもいいワインだが、明日からでも飲めるワインを目指している」まさに、いつでも誰にでも愛されるワインがいい。

そうはいってみたいものの、私は建築家でも醸造家でもない。

建築は住むだけ、見るだけ。ワインは飲むだけ、楽しむだけ。

それでも誰よりも興味と愛情を持って両者に接している私の楽しみ方は、建築とワインをイメージで結びつけることである。

作り手からは「そんなイメージじゃない!」と怒られそうだが、こちらは消費者。勝手に楽しませていただいているのだ。

フランク・ロイド・ライトの「落水荘」

旅行のついでに建築を見るのではなく、あの建築を見るために旅行を組む。

そんなことを始めたのは、フランク・ロイド・ライトの「落水荘」が最初だった。

場所を調べ、ニューヨークから6時間ほどのドライブを経てたどり着く。最近ではインターネットの普及はありがたい。大体のことは日本にいてわかるので、自分でたどり着くことができる。

いろいろ下調べをした後に、やっと自力でたどり着き、落水荘を生で見たときの感動はこの上ない。

1930年代、ライトが施主であるカウフマンに別荘を依頼された。それはカウフマンが持っていた土地の滝を楽しむ別荘なのだ。

本来ならば、その美しい滝を臨む形で設計するのが普通であろう。それでもライトはあえて滝の上に家を建てた。もちろん、家から直接滝に出ることができ、楽しむことができるという利点があるだろう。

しかし、そこにはもう一つの考えがあったように思う。ライトはすでに日本に来ていて、浮世絵も多数買っていた。落水荘の中にもそれは多数見られた。そんな日本の訪問により、ライ

トは水を見るよりも、音を楽しむ日本の慣習を身につけていたのではないだろうか。部屋にいて、流れる水、滝の落ちる水の音を間接的に楽しむ。

窓から見える風景は明らかにアメリカで、日本は感じられないのだが、水の音が私に日本を思い出させたのだった。

そんな落水荘で飲みたいワインは、やはり日本のものだと感じた。日本にあって、それでも品種は「ヴィニフェラ種」のヨーロッパ品種である「甲州」。ヨーロッパ品種と変わらない味を持ちながら、かすかに香る吟醸香。まさに日本固有のものでありながら、ヨーロッパを感じるこの品種。私はライトの落水荘との共通点を見つけたのだった。

桂離宮

京都にある桂離宮。ふすまの市松模様のモダンなデザイン、雁行に並んだ母屋。常に手入れの行き届いた庭。何年も時を重ねながら、人々の努力によりその美しさを今に伝えていく。とても日本的でもあるが、斬新であり、世界に通じるモダンデザインである。

その桂離宮を見たとき、ブルゴーニュのピノ・ノワールを思い出したのである。人の手入れの必要な繊細な品種、そしてやはりブルゴーニュのピノ・ノワールにしか出せない味わい。似ているワインはあるが、唯一無二の感じ。ブルゴーニュのピノ・ノワールには誰もが一目置いてしまう。それこそが桂離宮の雰囲気とびつりに感じたのだ。



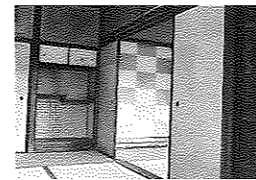
落水荘内部



F.L. ライトによる滝の上の「落水荘」



桂離宮 (京都)



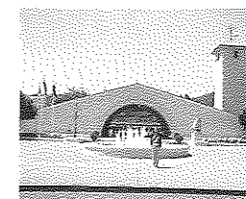
モダンなふすま



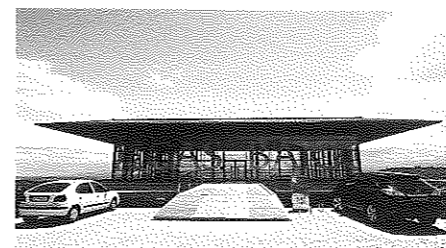
金沢21世紀美術館



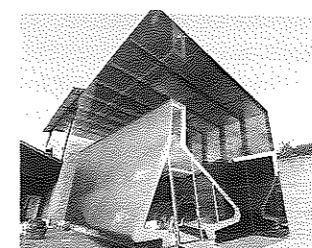
オーバスワン (ナバ)



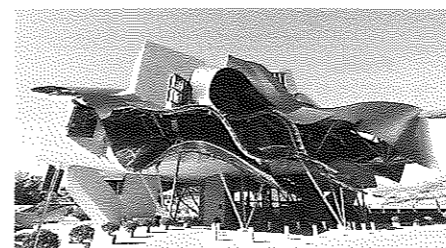
ロバート・モンダヴィ (ナバ)



ボデガス・パゾゴリ (スペイン)



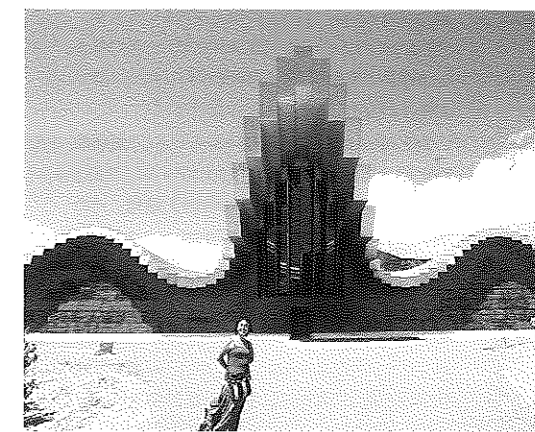
ザハ・ハディット設計のショップ



マルケス・デ・リスカル・ホテル (F. ゲーリー設計)



イオシス・ワイナリー



カラトラヴァ設計ノイオシス・ワイナリー



Profile

阿部容子(あべ・ようこ)
1973年東京都生まれ。学習院大学卒。高校講師。毎年「建築とワイン」をテーマに国内外を旅行し、生産者と触れ合いながらワインを楽しむ。2010年ワインエキスパート取得後、自宅でワインセミナーも開催。会員 No.16286

金沢21世紀美術館

さらに、金沢で見た「金沢21世紀美術館」。こちらは今をときめく日本の建築家、妹島和世と西沢立衛の SANAA が設計した建築である。2010年には建築の最高峰プリツカー賞を受賞した方たちだ。美術館は白が基調で、大きな窓がある。開放的で市民が自由に行き来でき、作品も自由に展示されている雰囲気がいい。日本的なものにこだわるわけでもなく、まさに世界に通じる作品で勝負している感じ。

そうなることに合うワインは。ここでは、建築のイメージではなく、思い出すのは同じく世界で活躍する日本人が作ったワイン。やはりワインの本場フランスで活躍する仲田晃司の「ル・デュモン」。そのクレマン・ド・ブルゴーニュを美術館の周りの芝の上で飲んだら美味しいだろうと思うのだ。

こんな風に想像力でまさに自分勝手に楽しんでいる。共通点は意外と多いものだ。

オーバスワン

そんな中、建築とワインがまさに融合しているケースが多々出てきている。

世界のワイナリーでは有名建築家とタッグを組み、印象的な建物で、ワインツーリズムを後押ししているケースが近年多い。

私が訪れた中には、アメリカ・ナバのオーバスワン。こちらはウィリアム・ペレイラの建築だ。彼はサンフランシスコにも印象的なビルを

建てている。オーバスワンはまさに、ナバの象徴。ワインのレベルもさることながら、ここを訪れた人はこの建物も忘れることはないだろう。門を抜け、やがて見えてくる神々しい姿に、ワインの格もまたあげてくれている気がする。

また、ロバート・モンダヴィはクリフ・メイによるもので、ワインを伝えた伝道師に敬意を払い、教会的な作りとなっている。そのワイナリーの建物そのものがエチケットとなっているのは、皆さんもご存じだろう。エチケットと同じ建物を見たときの感動は格別だ。

スペインのワイナリーを訪れて

そして、この夏訪れたスペインではその特徴がよくあらわれていた。

マルケス・デ・リスカルではホテルをフランク・ゲーリーがデザインしていた。ゲーリーはその特徴的な建築物で有名である。近くのビルバオにもグッゲンハイム美術館を建て、ビルバオ市の観光の復興に一役買ったといわれている。

その姿はまさに、ゲーリーであり、ゲーリー以外何物でもない。遠くからでもその姿ははっきりと望め、迷うことはないだろう。それでもその土地で採れる石を使い、ワインをイメージしたローズ色。ワイナリーであることも忘れさせない。

さらに、建物の印象的なのはもちろんだが、ホテルは5つ星、レストランもミシュランで星を獲得し、とても快適なホテルとなっている。ホテルスタッフもワイナリースタッフも訓練されていて、満足した滞在となるだろう。街自体はぶ

どう畑が広がる小さな田舎町だが、ここに泊まりに行く価値はある。世界中からワイン好き、建築好きが集まってくることだろう。

その近くにはイオシス・ワイナリーがサンディアゴ・カラトラヴァに設計依頼した建物が異彩を放っている。ボデガス・パゾゴリもイニャキ・アスピアス・イサによる建物である。どちらもスペインの建築家だ。前衛的な建物がおもしろい。

さらに、ロベス・デ・エレディア・ワイナリーはザハ・ハディットによるショップを作っている。ザハはイラク出身の女性建築家で、最近ではロンドンオリンピックのプールの建築にも携わっている。

ワインだけでなく、建築を見るためにここスペイン・リオハを訪れる価値は十分あるだろう。有名建築家の作品に囲まれながら、そのワインをいただく。最高の贅沢ではないだろうか。

今回うかがったマルケス・デ・リスカルのソムリエさんがワインが残り少なくなったときにいった言葉「The end is coming.」(どうやら終わりが近づいてきたようです)。

ワインも一本飲み終わるまでに様々変化するように、建築もその使われ方で年々変化していく。どちらも日々、時間と共に変化し、永久にその姿は続かない。人により印象も変わるし、時代によって評価すら変わるかもしれない。そのように永遠に続かないところがまた、両者のよさであり、共通点だ。

終わりは近づいても、最高のワインや建築を味わった至福の時の思いは永遠に続くだろう。